

## 東大寺法華堂執金剛神立像の模刻制作を通じた心木構造改変の検証とその意味

重松優志（東京藝術大学）

東大寺法華堂に安置される塑造執金剛神立像（以下、執金剛神像）の内部構造に関する調査は、昭和39年と平成18年の2度にわたり、透過X線撮影が行われている。機材の性能向上により、平成の調査では太い木材を部分的に彫刻した心木であることが判明した。この構造は、兼ねて同一作者・工房と考えられてきた戒壇堂四天王立像とも共通する。

しかし、新たな疑問も浮上した。1つ目は執金剛神像の両膝下にのみ無数の釘が打たれている点、2つ目は体幹部と両脚部の接合面が鮮明に映らなかった点である。この問題に関して、山崎隆之氏は両膝下を改変して心木に捻りを加えたため、X線の照射方向に対して接合面が斜めだったのではないかと、との仮説を立てられた。等身大にも及ぶ塑像の心木に上記の改変が可能であったのか。筆者は制作工程の追体験が行える、忠実な模刻制作による検証が最も有効だと考えた。模刻制作による検証は、これまでの執金剛神像の構造に関する資料や透過X線画像、3Dデータを用いた。

制作工程から心木構造を検証していく過程の中で、両脚の心木に添わせる支柱の存在が明らかとなり、山崎氏の仮説は実証された。しかし、この改変のみでは上半身の捻りが足りず、結果的に執金剛神像の動きは再現できないことも判明した。この問題に対して、筆者は更に透過X線画像の解読と実制作の検証を進めた。その結果、膝下に加え、胸腹部と肩木で心木改変を行った可能性を見出した。透過X線画像の胸腹部に注目すると平行に通る2本の横線が確認でき、これは木材同士の接合面が移ったものと考えられる。心木模型を制作し立体的に検証を行ったところ、一材であった体幹部の心木を胸部で一旦相欠き状に切り離し、材と材の間に三角柱の襜材を挟み再度固定することで、透過X線画像と同様の構造としながら執金剛神像の動きを再現できることを実証した。また、左腕の肩木に写る釘の存在と角度調整の困難さを根拠に、左腕の改変の可能性も併せて論じた。

加えて、心木のみならず土付けにも工夫が認められる。執金剛神像は心木に達する削り込みや嵩増し材の混入が行われており、これはいかに人体が自然に立っているように見えるかを試行錯誤した痕跡だと考える。この手法は、強固な心木構造を備えた塑像によって可能である。

模刻制作による造像工程の検証を通して、框に穿たれた柄穴の位置から、制作の初期段階は仁王立ちに近い姿勢であったと考えられた。しかし、金剛杵を振りかざす迫力を強調する目的のために、極めて効果的な心木の要点で、思いきった改変を行ったのではないかと筆者は考える。加えて、塑造ならではの直感的な塑形も執金剛神像の抑揚ある造形を支えており、改めて塑造技法の特性を最大限に活かした造形であることを実感する。執金剛神像の表現は、他の造像技法では辿り着けないものと結論付ける。